連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第㉛回

星素子 氏（美術家／言葉アーティスト）
――言葉アート「素ことば」の紹介

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼言葉をアートにする

人間が生き残り、進化してきた背景には、「言葉」を用い、理解し、その種族や民族が、あるいは国民が共栄共存してきたことが大きく影響しているといえるだろう。筆者は、ブリューゲルの「バベルの塔」の絵には特別の関心があり二つのオリジナル図を見に出かけたことがあるが、その主題は〝言語の混乱〟であり、結果、塔の完成はなく人々は離散したとされる。神が意図した通りであり、言葉や言語、つまりコミュニケーションの重要性を教えてくれる。

言葉は、「言の葉」とも呼ばれる。それは、木の枝の先に留まり光を求めて日々成長する片状の緑葉に似た意味合いとして重ねることが出来る。かなり古い話ではあるが、筆者が大学に入学し教わった英語の教科書の最初の一文は〝Language is always changing.〟であったと記憶するが、まさにこの意味合いである。「言葉」は、人間の社会での必須のコミュニケーションツールではあるが、意思の伝達ばかりでなく、文字としての伝達では明確にアートとして役割も担うことになる。

さらに、日本人としての私たちに幸いするのは、「漢字」が文字の形態に偏（へん）や旁（つくり）があることのほか、それぞれが意味を持ち、同時に情感を重ねることが出来ることである。情感は、さらに情景に広げることもできる。アートは技巧でもあるが、それを発展させ「言葉アート」という独自の世界をつくっている人物を今回は紹介したい。星素子氏である。

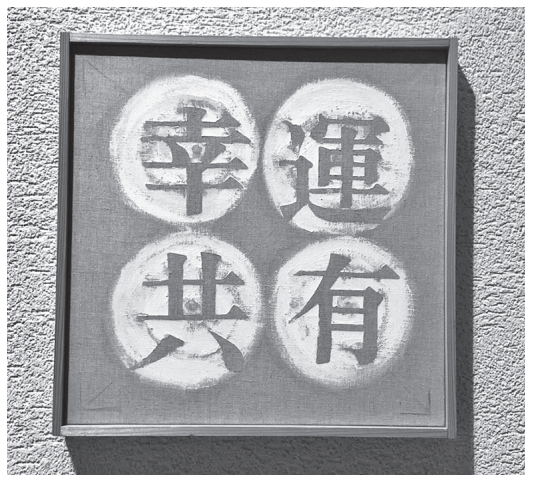
「言葉アート」の星素子氏

▼言葉との出合は宿命か

星素子氏と最初に出会ったのは、筆者が日本建築美術工芸協会（AACA）へ入会してからで、もう8年以上も前になる。その入会の動機つけは、本コラムの第13回で紹介した七字祐介氏との繋がりによる【註1】。

星氏は、当時から「言葉アート」と呼ぶ漢字4文字を方形に2行2列配置した表現方法を展開していた。その例としては、写真にあるように「運」「有」「幸」「共」の4文字の配置である。この漢字の選択、そして配置の順番は、個人の感覚による。それが「言葉アート」の由縁である。

実は、星氏がこうした文字表現の世界に入ることは必然であったようにも思える。星素子氏は、山口県徳山市に生まれた。現在の周南市で、長州、つまり吉田松陰の松下村塾の気風がある土地柄である。こうして星氏が入学した徳山小学校においては、素読の慣わしがあり、古今東西の詩歌を憶えて紙に書く学習が行われていた。



漢字4文字による「素ことば」

また星氏の母親は茶道を嗜み、これを教わったという。とりわけ影響を受けたのは、抹茶での泡立ち。泡の発生と消滅の現象を自然との調和、そして「曼荼羅／まんだら」の世界としてとらえた。子どもであったが心奪われたという。

父親は、大手ステンレスメーカーに勤務であったが徳山市から呉市に転勤。素子も高2で転校、瀬戸内海の二都市で暮らした。大学進学に当たり、これまでの心の世界を追求し、芸術と文芸を融合する志をもった。それは、前述した言葉や表現、さらには関わる小宇宙を実感し、ずばり日本大学芸術学部文芸科を選択、進学し、ジャーナリズム専攻を履修した。これは星氏自身が獲得した因果であったと評したい。

さらに日芸では、恩師でメディア美学者の武邑光裕先生の講義で、長い視座をもち未来的な思考を行うようになった。結果、星氏は小宇宙を小説と小論文にして卒業した。

その後、広告制作会社でコピーライターとして日本語、英語と対峙し文字との関わりを実務として深めた。それは、「守破離」の教えのように自身の境地を切り開くことになった。自身が発現したものが、「言葉アート」であった。その背景には、子供時代からの言葉との出会いが脈々と重なってのことと思える。強く言えば、宿命ともいえる。

▼平面展示から立体展示へ

星氏は、「言葉アート」を展示会やワークショップとして展開した。その年次進行は末尾の【活動】に記載した。なお、言葉アートは「素ことば」と称する場合もあるが、平面仕上げの活版作品を手にし、アメリカ3都市をチャレンジ旅も行い、2009年には、サンフランシスコの紀伊國屋書店（米国）において、作品の展示販売も行った。

2012年には、東京都立善福寺公園の桜の樹や藤棚に複数の「素ことば」作品を展示した。例えば、「生」「心」「野」「歩」／「観」「知」「夢」「我」／「夢」「風」「和」「支」の4文字をシルクスクリーンに印刷し木の枝の間に展示した。それは、公共の公園に「詩情」を添えるものとなった。

自然に詩情を気づかせてくれる インスタレーション

私たちに大きな変革を与えた災害が2011年3月11日（3・11）の東日本大震災と原子力発電所の事故であった。星氏は、ルーツが仙台の伊達家に繋がるので、被災地でも活動したが、そこでいわゆる「参加型アート」の重要性を認識した。

切っ掛けになったのは、プロセスとして地域小学校5年生に言葉アート素ことばワークショップ授業を行い、子どもたちの希望の「素ことば」を挙げてもらい、それをつなげていくワークショップであった。子どもたちの考える地域に抱く内発性を漢字で表現する自由と個性の発現には、子供ながらの、これまでの生きた経験（歴史）と現在の想いの発現であり、それは未来への発展を漢字として表現である。それは平面的に自己実現するのではなく、立体的に3Dとして外部表現することになる。しかも、個人ではなく多数の人々が表現するというアートの民主主義ともいえる重要性を潜んでいる。これは、先述した善福寺公園の例とも関連があるが、「立体展示」（インスタレーション）である。

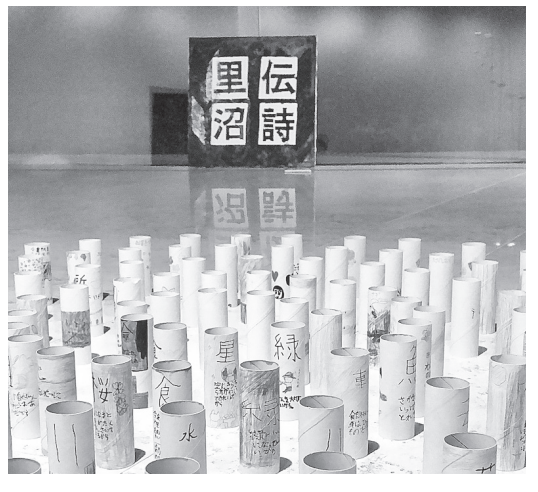
星氏は、こののち参加型&体験型のインスタレーションに注力している。

▼自治体&施設との連携

素ことばの広い可能性については、筆者も理解しているが、その取り組みが、公共施設での展示や展開に拡大していることは喜ばしい。

その例として、昨年は群馬県立館林美術館の開館20周年記念行事企画の中で、星素子展『館林バトン&エアハグ』が行われた。2021年9月～11月であった。企画は次のような趣向となった。参加型アート《館林バトン》では、家庭のトイレットペーパーのロール芯を、運動会のバトンのようにとらえ、「未来に手わたしたいバトン」とみなす。ロール芯には、募集するテーマに関係した漢字1文字を書き、会場に設置されたテーマごとの「館林バトン漢字収集BOX」に投入。1週間ごとに星素子が回収し、インスタレーション作品として追加制作し展示。最終日に向けて次々と広がっていく、立体的&時間成長型の展示で、まさに参加型インスタレーションである。こうして得られた作品の例を写真に示す。

《館林バトン》のインスタレーション



その2年前2019年には、中之条ビエンナーレ国際現代芸術祭2019が、8月24日から9月23日まで、1カ月間開催された。この中で星氏は、「中之条バトンをつくろう！」に参加し、展示を行なった。展示品の《中之条バトン》は、中之条小学校でのワークショップ授業の一環として〝漢字バトン〟を書いてもらい、星氏がインスタレーションとして制作し、展示会場の四万温泉・旧第三小学校に展示された。バトンを書いた子ども達が、両親や祖父母と夢中でマイバトンを探す光景がつくられたという。

《中之条バトン》のインスタレーション

▼未来への言葉のバトン

星素子氏は、実は新宿中村屋の相馬黒光との縁感でもあると聞く。時代を切り開く血筋が流れていると筆者は期待したい。いま大事なことはアートであり、「時代を切り開くこと、それはデザインすること、あえて言えば22世紀をデザインすること」である。目標は未来であり、未来に躊躇することなく扉を開くことに違和感を持たせない事前の表現であり、それは言葉が後押しし、実は予見してくれる。それを見える形にするパブリックアートは、AACAで、その仲間たちが追い求めていた共通語でもあった。星氏はそれを個人的な宿命としてすでに追い求め、実践している。大いに応援したい。22世紀、さらには23世紀へとバトンを手渡して欲しい。

【註1】七字祐介氏「都市を記憶する装置としての複合施設の、設計と環境デザイン」、『新エネルギー新聞』、第191号10面（2021年8月2日（月）発行）http://www.kofuza.com/images/nen_2021_13.pdf

【活動】

2021年〝館林バトン&エアハグ〟群馬県立館林美術館開館20周年記念行事、館林

2019年〝中之条ビエンナーレ〟エデュケーション・プログラム・アーティスト、群馬

2018年 作品恒久設置〝目黒 素ことば〟目黒セントラルスクエア森の広場、東京

2018・2017年〝aaca BOX展〟建築会館ギャラリー〟東京（オーディエンス賞）

2018年・2015年・2013年〝日本視覚詩パリ展〟ギャラリーサテリットパリ、フランス

2017年〝MOTOKOTOBA WORKSHOP〟オリエント美術館、ポルトガル

2017年〝三三三ことば市素こと